

フェルメール展

上野の森美術館 18.10.05～19.02.03 大阪市立美術館 19.02.19～05.12

「ヨハネス・フェルメール」(1632～1675)は、17世紀オランダ黄金時代を代表する画家で、神秘的にして、緊張感を湛えた静謐な空間構成で“フェルメール・ブルー”と言われる光の粒子までも捉えた独特の質感を宿す作品が特徴である。

画伯の作品数が「わずか35点」と極端に少ないのは、絵を高く評価していた後援者やパトロンのためにだけ絵画が描かれたためとされている。

本展は、日本美術展史上最大の展覧会で、「傑作9点」が公開されている。

《マルタとマリアの家のキリスト》 画業を始めた聖書や神話場面の作品。

《手紙を書く夫人と召使》《牛乳を注ぐ女》 日常場面に焦点を当てた作品。

《ぶどう酒のグラス》 (写真左) 日本初公開作品で注目されている。

《取り持ち女》 急遽追加出展(9月10日発表)決定の「風俗画」。

また、画伯と同時代の画家「ハブリエル・メツー」「ピーテル・デ・ホーホ」「ヤン・ステーン」などの希少作品「約40点」も展示されるため見逃せない。



《ぶどう酒のグラス》



ステンドグラスのモチーフ

17世紀のオランダでは、若い男女がワインを飲みながら探勝する情景が好んで描かれた時代である。本作は、初期から中期へさしかかる過渡期の「西洋伝統の象徴的な表現で男女の微妙な関係を暗示」させるもので、家具類や衣装が精密に描き分けられているのが特徴である。テーブル上には楽譜、椅子には古楽器のリュートが置かれた「愛」を暗示する室内で、黒い帽子の男性が女性にワインを勧めている。ワインを飲む女性の視線の先には、半開きのステンドグラスの窓があり、その中央には馬具を持った女性が描かれている(右図)。

この手綱を持つ女性の絵が表すのは、伝統的に「節制」であり、戒めを感じさせ、絵画全体では室内での色恋沙汰を戒める「寓意」と考えられる。